

PHD LETTER

42

PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT 1992・3

- 11月3日 記念式典追加報告 3P
- タイ・スタディ・ツアー・レポート 4~5P

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

発行:財団法人PHD協会
 編集人:草地賢一
 住所:〒650神戸市中央区元町通5-4-3 元町アーバンライフ202
 TEL(078)351-4892 FAX(078)351-4867
 郵便振替:神戸1-29688 財団法人ピー・エイチ・ディー協会
 定 価:100円



(フィリピンネグロス西州)

砂糖キビ畑に囲まれた
 ネグロス西州パニケ村の朝
 砂糖キビを運ぶトロッコの線路を歩いて学校へ
 学校と家の手伝いが終わったら
 裏のコートでバスケットしようね、みんな

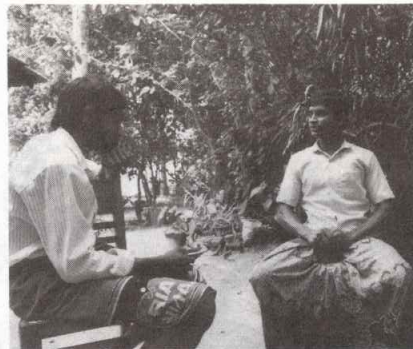
草の根の人々を訪ねて

12月の半ば急にスリランカへ飛んできました。アジャント君の最近始めている小さな農業協同グループ「アジアのそよ風農場」の今後の展開に関する打ち合わせ、伝統的地域指導者であり、地主であるチャールズ村長との関係調整、これと深く関係して92年度研修生の選考が、出張の主な目的でした。

今迄何回かこの場で紹介したように、チャールズ村長は開明的な村の指導者です。しかし保守的伝統の強いスリランカの農村では、村の新しい動きはすべて出発点から順調に進むことは大変まれなことです。特に地主と小作の関係がからむ農村開発活動は、微妙な利害が伴うだけに大変気を遣わねばなりません。アジャント君達の側から見れば地主である村長の利益を侵さないように気を遣いつつ、少しずつ地道に事を進めなければなりません。村長の側から見れば彼等の動き、動きをすべて把握しておき、にらみをきかせつつ同時にパトロン（保護者）としての立場を確保しておかねばなりません。アジャント君達の動きが小さい間はまた経済的に自立してない間は、村長にとって大きな不安はありません。しかしこの動きや規模が拡大してくれば、伝統的な土地所有制度に支えられている優位性は不安定になってきます。

PHDは6年前からボヤワラーナ村に

関係し、この開明的な村長と友好的な交流が続けていることは皆様もご承知の通りです。勿論この関係は今も良好です。しかしアジャント君が始めた協同グループは、今後少しずつ参加者が広がり、現在進めている乳牛飼育、ミルク加工等の畜産事業が大きくなってくると村長、PHD、帰国研修生の良い関係は余程充分連絡調整を取らないとどんな方向に向かわかりません。



アジャントさん(左)とシャーンタさん

アジャント君が連絡してきた「アジアのそよ風農場」のグループの中から92年度の研修生をという提案は、90年、91年私のフォローアップ訪問で一度ならず村長とも調整済みのものでした。人選についてもグループの推薦を尊重することになっていました。

12月19日の夜カトナヤケ空港で村長の出迎えを得て村に向う途中、彼はこう言いました。「Ken、誰が候補者なのか」

伝統と新しい動きのはざままで

私はびっくりしました。同時に少し不安になりました。果たしてアジャントと村長の関係はこの人選について充分な接衝があったのか。「Charles、僕も聞いていないんだ」。

村までの1時間余りの道中、何とか村長の顔をつぶさず、しかも僕が帰国した後の彼とアジャントの関係が悪化しないよう気を遣いながら話し合いを進めました。さらに5日間程の村滞在中さまざまな話し合いを重ねて何とかアジャント推薦のシャーンタ君を研修生とすることで結論を得ることができました。

今回はアジャント君が事前に村長との調整を十二分にしていなかった、これは彼の若さのせいであるということにして一応事無きを済ませました。

この出張で学んだことは、保守性の強い農村で何か変化の伴う活動が起きてくることは、基本的に大変望ましいものであるが、これが草の根からであればある程微妙な事柄である。外から関わるNGOにとって大切な点は、継続した長い交流と、村人と指導者双方への信頼関係がしっかり築けていなければ、すべての努力が一瞬にして水のあわになりかねないということでした。

総主事 草地賢一

私もちよっと 世界を斬る!

「脱工業化に再生の道」

大森昌也 信子 兵庫県朝来郡和田山町 朝日 研修生指導家庭

昨年、バブル崩壊に始まり、ソ連の崩壊で終わった。アメリカの金庫は空っぽ。金持ちドイツは東欧へ、同じ金持ち日本はアジアへ勢力伸ばさんと、天皇を歴訪させ、宮沢首相は韓国へ。激しい抗議の出迎え。「もう一度、17才の時に戻して欲しい」元従軍慰安婦の67才の金学順さん。金さん17才の時、私は中国東北地方で生まれる。父は兵隊にとられ死ぬ。3才の時、母に手ひかれて(妹をおんぶ)引きあげ。「ソ連兵だ! 便所に隠れろ!」の恐怖の悪夢に青年期までさいなまされ

る。こんな経験を持つ私は一度も海外に行っていない。☆正月、厳冬期、加藤文太郎の足跡を単独行したり、幾度もヒマラヤの頂きをきわめた岳友に会う。彼は「頂上から層をなしたスモッグがみえる」と。この6月「地球サミット」が開かれる。南から「北側の脱工業化」の要求が出ているという。当然かな。☆未だ『ジャップガン』(日本軍の砲台)の残ガイのあるパプア・ニューギニアから、昨年、我が家に炭焼き研修に来たレル・サバさんは、「田畑には老人ばかり、若い人、お金お金、レストランレストラン。日本亡びる」と言った。今国会で首相は、「米の自由化」宣言。近くのPTA会長

を務める郵便局長は「もう誰も米を作らなくなる、ここら(但馬、兵庫県北部の山村)は森林になる」と。もう既に廃村になり森林になったところ十指に余る。この動きは止まらずびびりゆくの。☆唯、南の要求に答えていく、脱工業化に、再生の道あり。それは、生活全般を自らこなす百姓の道である。私は百姓めざし、廃村寸前の山村に入って5年。今2才の双子の女の子を始め6人の子、犬、猫、山羊、羊、豚、鶏、鴨、蜜蜂らと共に、無農薬、有機肥料で米野菜作り、石釜で天然酵母パンを焼き、炭焼きなどしています。百姓めざす人、そうでない人も、気楽に寄って下さい。

PHD10周年記念事業 マチと南太平洋・アジアとムラをつなぐメドレーセッション 11月3日記念式典報告 その2

前号で、かいつまんで様子をお届けしました11月3日の記念式典。たくさんの方々にお集まりいただいたのですが、ご都合や遠方でご参加いただけなかった会員、協力者の皆様に、盛り沢山の内容の中から、今井鎮雄理事長の挨拶と提唱者岩村昇博士の講演の要旨を紹介します。

(文責・編集部)

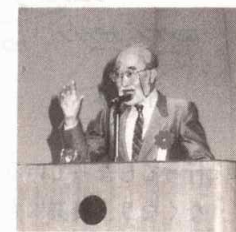
PHD運動が10年経ちました。本日お集まりの皆様や今迄関わった下さった7000人を超えるの方々によってこの運動が進められたことを思う時、心から感謝を申し上げずにはられません。

思えば10年前「国際ロータリークラブ第1回国際理解賞」を岩村先生が受賞されこの賞金をどのように使うのか、又受賞スピーチをどうするか等を先生と私が

1962年、私は日本キリスト教海外医療協会から派遣されてネパール入りし、タンセンの病院で結核患者の治療対策にあたっていました。やがてそれはヒマラヤの山村を巡回診察する事になり、同時に結核拡散の根源を断ち切るため、トイレ作りや簡易水道作りといった公衆衛生の普及、実施も行う様になりました。

この間、心豊かなやさしい草の根の人々との出会いが、幾度となくあったのです。

ある巡回の折、私は細菌性赤痢にかかり、その村の村長の家の軒下で呻めくはめとなりました。運悪く抗生物質を使い切ってしまう途方にくれていると、村長が「お前は人の病気は治せても自分の病気は治せないのか」と言っ、村の民間療法師の所へ私を担いで行きました。抗生物質がなくては治らぬと思っていた私ですが、草の根の医者「この時期、よくある事だ」といって現地の薬草を調合し、すっかり治してくれました。近代医学に頼り切り、全くなすべがなかった私は目からうろこの落ちる思いでした。更には、私を運んでくれた村長ですが、この国の厳しいカースト制度の下では村長自らが人を担ぐなど考えられない事です。次の選挙での評判を落としかねないと心配する私を尻目に彼は、「なに、わ



岩村昇理事

何回か話しあう中でPHD構想は生まれてきました。この賞金は第二の岩村先生が生れるように10人程の若い人々に使って欲しいという注文がついていたのですが、岩村先生はご自分の長いネパールでの経験をもとにできるだけエリートよりも農村や漁村の草の根のリーダーを育てたいと力説されました。

これがPHD構想のもとになりました。

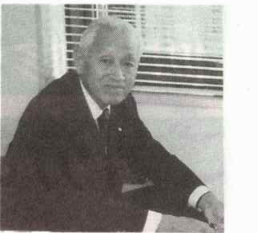
しの行為を見て変に思う様な奴の票はいらん。人が困っているのを見て助けたいと思う心を理解する奴の票だけいいのだ!」とあつけらんとしています。私は生活面では極貧といっている人々から非常に豊かな心と伝統医術のおすそわけを戴いたのです。

一方、ネパール滞在中、神のお恵みで私達夫婦は男女6人づつ12人の養子養女を迎える事ができました。

その中の長女ウマがフィリピンの大学で草の根の現場における保健学を学んで帰り、ネパールの貧しい開拓村で生活改良センターを作ろうとしました。しかし村の人の協力が得られず挫折しかかっていたところ、ある朝5才位の少年が一束のとうもろこしを持って来て「ヨ・ディディコラギ」(これ、お姉さんのために)と言って差し出すのです。ネパールでは5才になると女の子は台所の手伝いや水汲み、男の子は農作業の中で最も簡単なとうもろこし作りをします。従ってこの少年は初穂を家族に食べて貰い、余った1束をウマの所へ持って来たわけでした。

「私は少年の手を通して神の愛を戴いた」とウマは涙しながら勇気付けられた事を語っていました。

また、後日私がこのセンターを訪れた時、大変心なごむ光景に出会いました。ここでは子供達に読み、書き、算術を教えています。丁度昼食時に各自が家から持って来たそばやとうもろこしを葉っぱのお皿に出していました。ところが1人の少女は何も持って来ていません。それに気付いた隣の少年が自分と相手のお皿に1粒づつ交互にとうもろこしを入



今井鎮雄理事長

ロータリーの人々を中心に基金が拠出され、県、市のご協力を得て財団が生まれました。ボランティアの人々のご奉仕、理事の先生方のご努力、そして職員の献身によってPHDは10年を迎えることができました。これからは日本のNGOのリーダーとしての役割も果たさねばならないでしょう。ますます皆様のご協力が必要です。どうぞよろしくお願ひします。

れてゆき、最後の1粒になった時、さて困ったという表情で一瞬動きが止まりました。私はどうするのかなと思って見ていると、少年は最後の35粒目を弱き存在の少女の皿へ入れたのです。

この様に私達は草の根の人々から「生きるとは分かちあう事。弱者と」という事をいたる所で学ばせて戴きました。

日本は金持ち、そして物持ちだそうです。今からは、アジアの人と共に生きるために心を持つことが大切です。今日の報告の中にもありましたけれど、PHDの研修生と出会うことで、人間変革が起ってきます。自分の時間、技能、知能、ポケットマネーの10%をもち寄れば、まるで家庭教師のように、アジア・南太平洋から研修生やゲストが来て下さるんですね。いつでも、どこでも、誰にでもできるんじゃないですか。日本は日本でできない大事な役割を担わされるようになりまし。今から宇宙船地球号はどこへ行くか。その舵取りをする人材をPHDは作っていくのです。

生きるとは、弱者と分かち合うこと。人間変革を遂げるためには、物質的、金銭的にできるだけ質素な生活にならなくてはいけない。あまりにお金と物が多すぎると高い志が生まれてこない。かわいそうだから援助するものではありません。アジア・南太平洋の草の根の人たちの自立した村づくりの支援がその人たちだけでなく、私とあなたを変えていく。これからの目標が、だんだん見えてきました。そこに向かって勇猛邁進していきたいと思ひます。

研・修・生・レ・ポ・ー・ト

大詰めの9期研修

ご苦労さんでした

8期2班 サムスアリスさん / インドネシア

吉村正信氏(兵庫・御津町)～協同組合学習(神戸市/兵庫県漁業協同組合連合会)～研修報告会(神戸市/PHD協会)～12月15日帰国

帰国後の村のネラヤン(漁師)たちのグループの活動に生かしていけるヒントを、漁業研修の現場のみならずたくさんの人々との出会いの中で得ることができたサムスアリスさんは、奥さんと8人の子供が待つインドネシアに帰って行きました。終わってしまえばあつという間の一年も、家族を残してきた彼には長く感じられたことでしょう。

研修の締めくくりとなった11月～12月は、彼自身が日本で関心を持った船曳き網漁の研修となりました。以前同ヒインドネシアのファイジンさんベディさんが



帰国前日の報告会で、研修について語るサムさん。

指導を受けた室津漁協の吉村さんのお宅で滞在させていただき、海の上での実習と陸に帰ってからの協同組合のはたらきについてのお話を通じての学びでした。帰国を2日後に控えた12月13日には県漁連の斎藤指導部長から、わかりやすく協同組合のはたらきと日本で組織された経緯を話していただきました。一年間の報告会では、日本の研修の成果と帰国後の抱負をユーモアたっぷりに話してくれました。一年間サムスアリスさんの研修を支え励まして下さった皆様、心から感謝申し上げます。

- サウエーさん/タイ 広岡史郎氏宅(兵庫・福崎町)～山田芳弘氏宅(兵庫・社町)～西日本研修旅行
- ナンダナさん/スリランカ 中野宗嗣氏宅(兵庫・春日町)～藤本敏孝氏宅・浦川モーターズ(兵庫・加美町)～西日本研修旅行
- ラニーさん/ババア・ニューギニア 牛尾武博氏宅(兵庫・市川町)～森野英樹氏宅(兵庫・加美町)～岩佐康子氏宅(兵庫・姫路市)～西日本研修旅行
- ジャネットさん/フィリピン 篠山町保健センター/谷岡治氏宅(兵庫・篠山町)～岩佐康子氏宅(兵庫・姫路市)～西日本研修旅行



エンジンの修理を教わるナンダナさん 多可郡加美町 浦川モーターズで



北九州市祝町で

＜西日本コース＞

9期の研修生4名の研修もいよいよ大詰め。12月からの研修も、各自テーマを絞って行いました。サウエーさんは養豚、養鶏について、ナンダナさんは乳牛飼育、オートバイ修理について、ラニーさんは養鶏、洋裁について、ジャネットさんは保健(栄養)、洋裁につ

大分 耶麻溪町～福岡 庄内町～金田町～北九州市 一宗像市～熊本市～水俣市～長崎市～広島市 上下町～口和町～庄原市～倉敷市～山陽町～岡山市

村でがんばる帰国研修生たち

～フィリピンネグロス～

7期 ドミナドール・ヒロゴさん 28才

Mr. Dminador S. Gelogo
・89年4月～90年3月
・農業 兵庫県市島町、市川町、黒田庄町他



彼が属している南ネグロス小農民協会(KASAMA)からの奨学金を得て、現在、ネグロス農業大学に入学し、植林の勉強中です。ネグロス西州の南部は山岳地域ですが10年程前に、ほとんどが伐採されてしまいました。そんな状況を改善することもこの地域に大切なことです。週末にはオリंगाオの家に帰り、家族とともに農業をしています。結婚はまだみたいです。

両名とも c/o KASAMA N.N.INC., P.O.BOX21, Kabankalan, Negros Occ., 6111 Philippines

8期 ネストール・セルバンドさん 28才

Mr. Nestor T. Servando
・90年7月～91年6月
・農業 兵庫県丹南町、南淡町、市島町他

昨年12月に結婚し、今、幸せの絶頂です。山にある彼の実家と街道に面した奥さんエプリンさんの家を行き来して、両方で農業をしています。特に実家の方では、米、とうもろこし、ピーナツ、豆類に何種類もの果樹を栽培し、また樹木が失われた山に積極的に木を植えています。自分の農場が地域の人々のモデルになればとがんばるネストール君です。



タイ フォローアップ スタディツアーレポート

91.12.22～92.1.1 サコンナコン県、カラシン県、チェンマイ県

農家のお父さん3人滞在家庭の4人の参加者を中心にした14人で、年末に東北タイと北タイの村をまわりました。今回の目玉は何といっても、東北タイの村人8人が我々に同行して、北タイ、カレンの村を訪ね、タイの中で農民交流が実現したことです。同じ国に住みながら、東北と北では距離もあり、草の根の村人同士が出会うことはまずありません。農業、生活の様子を見、意見を交わし、双方に刺激がありました。今回はカレンの村人を東北へと考えています。7回目となるタイへのツアーの様子、研修生の村での活躍ぶりを参加者のレポート抜粋で報告します。



村のおもてなし

たけうちまさこ 竹内成江(加古川市 小学6年)
とまった家では、食事のとき、ぜったい一人分は多目にご飯がもらわれてあった。そのお皿から、それぞれとって食べるのだけれど、どの家でも「いっぱい食べてネ」というような手ぶりですすめてくれました。

大学生は考えた

いしきかおり 石坂典明(和歌山市 大学3年)
イサン(東北)で日本の村と似たことを耳にした。若者の多くが、現金収入のためにバンコクへ行ってしまっているという。この状況がすずめ村に若い人材がなくなり、農業にも大きな影響を与えるだろう。物質的豊かさを得るために失われるもの。日本の中でも問われるべきことだ。

山のおばちゃんのヤル気

やまだあきこ 山田章子(千葉市 YMCA勤務)

昨秋、船橋YMCAに布織りの実演に来てくれたベリポーさんの村、ムシキで2日目の夜、そのグループの女性たちと集まりをもった。これまで自給用だけだった布が、PHDを通して、販売でき、少額でも収入となり、仕事への意欲ができたと話してくれた。

タイの中での交流

やまだよしひろ 山田芳弘(兵庫県社町 農業 研修指導者)

カレンの村への行程には東北タイの8人が同行しました。私のところで研修をしたバムルンが、作物の苗や種を自分の村へ持ってかえる様でした。この様な交流は大変よいことでした。

友だちは日本の方がしあわせというけれど...

はまら 浜地まや(神戸市 小学4年)

村の子どもたちは、とてもはずかしがりな反面、せっきょ的だった。どこの村でも、わたしをじっと見ていて、わたしがふりむくと、きやあきやあとにげて

第10期 研修生紹介

シャーンタ・ラル・パティラジャさん(24歳 男性)
スリランカ ボヤワラーナ村
研修内容 農業技術、協同組合活動など



ティン・アン・ウィンさん(38歳 男性)
ビルマ マンダレー州
研修内容 農業技術、協同組合活動など



第7期生のアジャンタ君が進める「アジアのそよ風農場」の5人の1人。極貧の中で村に留まることを決意。とても小柄で一見10代にしか見えないが、強い意志とゴツゴツの手が印象的な好青年。

ハスマヤニさん(19歳 女性)
インドネシア西スマトラ州パシルバルー村
研修内容 保健、栄養など



セニフィタさん(20歳 女性)
インドネシア西スマトラ州パシルバルー村
研修内容 保健、栄養など



ミナンカバウの母系文化を背負って立つ頭の良い人。早く父を失くし、障害を持った弟の世話をしながら困難を切り拓く強い意志を持った人。村の若い女性から高い信頼を得ていると見えた。

約10年前からビルマ第二の都マンダレーから西へ約2時間の農村に家族と共に入植。エリート学歴、職を投げ打って泥にまみれて草の根の農村開発に献身。村の発展の中心は農業開発と信じている。

アリ・ムルティムさん、サムスアリスさんの村の漁業グループの推薦で決定。当初、次年度の予定が、繰上り、ハスマヤニさんと同時に来日。6人兄弟の末っ子。

行く。だからわたしがおいかけてたりしていつのまにかおにごっこ。知らず知らずのうちに友だちになる。人見知りするわたしが、タイでこんな風にたくさん友だちができた。それはタイの子がとても心のあたたかい子たちだからだと思ふ。



タホタ村のディカさん(右端)の案内でイチゴ畑をみてまわる東北タイの村人たち

まだ終わらないあの一年

はまらゆうこ 浜地佑子(神戸市 歯科医 ワラヤさん滞在家庭)

私たちがすごしたあの一年、彼女は十分に学んで帰ったのだろうか?私にできる事、すべき事が他にあったのでは。3年ぶりに会うワラヤ(我家にステイした研修生)の、日本で学んだことを村に役立たせたいという意欲に接し、考えた。私に今すぐできることはない。旅から帰った今、彼女の生活に思いを馳せ、案ずる度、イサンの乾いた土地が、出会った人々の顔が蘇ってくる。私の日本の生活と彼女の村の生活がつながった。そう実感で

きたことこそ問いつけたあの一年の重みだったようだ。

アツケラカンと木がない

はまらゆうこ 浜地律知(神戸市 歯科医 ワラヤさん滞在家庭)

東北で村人が我々を山に連れていってくれた。昔は森だったそうだが、今は木がほとんどない。妙にアツケラカンとした風景だ。伐採の結果であるが、単に切ってしまったからだけでなく、保水能力を失った土地は雨で沃土を流出して痩せてしまう。さらにこの土地に土を痩せさせずキャサバやユーカリを目先の現金収入策として植えるからコトは深刻。林業の町、兵庫県波賀町から参加の田中お父さんも「木がのうなるとえらいこっちゃでな、えーつ」と言っておられた。木は毛よりも尊しということか、楽屋オチ。

着実な歩みを示すタホタ村

たなかこうろう 田中五郎(兵庫県波賀町 農業 研修指導者)

タホタではコマ君(第5期研修生)らが行っている苺作りが本格化していました。作付け面積は約60ライ(約9町歩)。日本でも同じ作物でこれ位の面積があれば、市場で高く評価され、安定した価格で取引されます。この村では昼と夜の温度差が大きいので大きく立派な苺ができるそうです。今年は苺の間ににんにくが

作ってありましたのでコマに聞くと、にんにくを作ることに害虫の予防になるとのこと。日本でもスイカとネギの混植の成果をきいたことがあり、すばらしい発想と感心しました。

心の旅路、タイ紀行

ひろおかまさこ 広岡正人(兵庫県福崎町 農業 研修指導者)

東北のタイの人たちとカレンの村を訪れその別れの前の話し合いの折、東北タイのサンコムさんが、カレンの村には電気が入らない方がよいのではと言う。むろん軽蔑の意味でなく、自分の村に電気が入ってからの経緯を思い、便利さの中に失うものがあることを言っているのではないか。人間の幸せとは何処にあるのか考えさせられる。

初めてのタイで

とくながくにこ 徳永久仁子(奈良市 小学6年)

カレンの村では、夜は窓が開けっ放しで寒かったり、トイレは遠いし、もう大変でした。でも村の人々の大変さはよく分かりました。日本がぜいたくすぎるのかもしれないと思ったりもしました。私はタイの人はけっこうお金持という感じが行く前にはしていましたが、全くその反対でした。でも村の人達はびんぼうでもなく、金持ちでまなく、ただ、ただ豊かな感じがしました。

私の学んだこと

とくながゆみこ 徳永由美子(奈良市 高校教員)

農村の過疎化、企業戦士や過労死予備軍の会社人間。子供はという学歴社会を生き抜くために幼児期から塾通い。家族はばらばらでいつも何かに追い立てられるような生活。GNP世界第2位のこの暮しのどこが豊かなのだろう。私たちの訪問した村は確かにモノは少なく貧しかった。しかし何と彼らの時間はゆったり流れていることだろう。家族と過ごす時間も多く、第一私たちのような訪問者に何と多くの時間を割いて下さったことだろう。私たちに同じことができるだろうか。大変な犠牲を覚悟せずにはとてもできない。タイの農村で私は本当の豊かさについて示唆を得ることができた。

子供の笑顔

ひろおかまさこ 広岡美知子(兵庫県福崎町 中学2年)

カラシンの村の学校で、初め、遊んでくれるか不安だったけれど、彼女たちの

笑顔を見て、勇気をもって外へ誘いました。でも今度は言葉が通じない…。態度で表わしたらいいと思ってゲームをしました。そのときの笑顔はとてかわいかった。

PHD NEWS

〈会費・御寄附寄託状況〉

1991年 11月	84件	1,952,754円
12月	683件	6,850,615円
1992年 1月	372件	3,512,481円
	1,139件	12,315,850円

以上の通り、多くの皆様より会費とご寄附を頂戴致しました。ご協力いただき、深く感謝申し上げます。

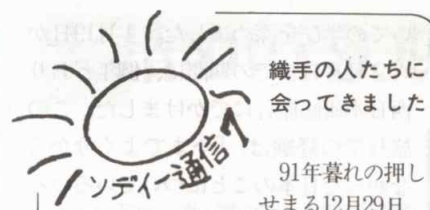
〈ホームステイ先を募集〉

4月より来日予定の次期研修生のホームステイを募集中です。来日後、約2カ月間日本語を学びますが、その間と1年間研修を行う合間に神戸に帰ります時(平均1カ月に4~5日)にお世話いただける方を探しております。滞在可能な方、お心当たりの方は是非PHD協会までご一報下さい。

- 10期生4名 詳細は別掲
- 内容 原則として、平日の昼間は語学学校、PHD事務所に通いますので、朝食、夕食及び宿泊のお世話をお願いします。
- 経費 当協会規定の額をお支払いいたします。

〈あたたかいご協力、ありがとう〉

ラニーさんの目の治療のため、鳥取の大源先生、百村先生をはじめ、全国の皆様(総件数24件)からのご協力をいただき、手術も無事終えることができました。ありがとうございました。感謝しつつ、ご報告いたします。



織手の人たちに会ってきました

91年暮れの押しこめる12月29日、タイ時間午後6時よりムシキー村のベリポー家で「タイ、ムシキー 布がंबरの会」の会議が行われる。メンバーの村の女性、PHDスタディツアーの日本人、そしてそれに同行してきたイサーンの人々、と多彩な顔ぶれである。ベリポーさんの日本訪問についてや、化学染料を使わないことの確認など、PHDと村の人で意見を交わす。やはり布が売れたかどうかは彼女達の一番の関心事らしい。かばんを作りたいという意見も出る。PHDからは細い糸で薄い布を作ってみてほしいと要請。さらに、バムルンさんより「イサーンでは新しい色や模様を研究して、作っていく試みが行われている。カレンも自然の色や手作りを大切にしながら、新しいものを見て、研究したらよくなるだろう。イサーンと交流してみてもどうか」という貴重な意見を頂く。これは大きな刺激だったようで、「来年は是非カレンの人がイサーンに行ってみよう」という希望が出てくる。ランプの影に、そっと座っていた彼女達、その胸に秘めたやる気を垣間見た気がした。

このやる気が種火となって始まったこの活動。2年が過ぎ、「もの珍しさ」で人を魅きつける第一段階から、「質」が問われる第二段階へ入ってきた。これからは「質の向上」と「伝統の維持」の微妙な接点を求めていくことが課題であろう。そしてこれを支え、ひびいていくのは、やはり彼女らのあの「やる気」であると思う。

西村由美子

西宮市 大学2年 第7回タイツアーに参加

○月×日のPHD協会

総主事 草地 学生の頃、九州に出入りしていたことがあり、西日本の研修旅行では、九州言葉を駆使し、関西弁で日本語を覚えた研修生を混乱させ、一番若いナンダナ君に「よかよか」を伝授。

主事 藤野 恒例の海外での散髪は今回はマニラで。偶然その床屋の向いのレストランで、イメルダ夫人の朝食会があって、黒山の人だかり。帰国後、事務所出入りの奥様連にサルだカッパだとウケる。

主事補 中尾 正月にホームステイをお願いしたお家に研修生を迎えに行き、山とごちそうになり、そのエネルギーを仕事に投入と思いきや、詰め込みすぎでハライタとなる。お粗末。

囑託 小松 第2回保育者のスタディツアーに加わり、フィリピンへ。戻って一週間で西日本研修旅行へ。男女雇用機会均等法の実践される職場に納得しつつも事務所の仕事はあまりゆく。

囑託 平野 西日本研修旅行前半部に加わり、大分〜福岡県を巡る。初の長めの出張で、神戸に帰ってから発熱ダウン。肉体的疲労より気疲れからだともっぱらの評判。



編集後記

PHD10周年記念式典にむけての活動に超多忙を極めている真最中に私たちは、事務所のドアをたたいてしまいました。予備知識もないままタイから迎えたベリポーさんの歓迎パーティーにいきなり参加。まるで私たちのために聞かれたパーティーだわと思わず陶酔し、気がつけば二人はいつの間にかPHDに足を引っ込んでいたのです。

そして知識も持たぬまま丹南町への旅に同行。そこで私たちを待っていたのはタイの人たちの草の根コンサートの準備とバザーの売り子でした。用意されているはずのテントはどこにも見あたらず、結局地べたに「ござ」を敷いての商い。二人の「関西商人」ぶりを如何なく発揮…とまではいきませんでした。実際の活動に触れることで、私たちが持っていたPHDに対する敷居の高さがなくなりました。

それに、事務所の人たちは、ほんのちよっと(?)ぶっ飛んでますが、あった

かくていつも一所懸命です。みんなと接していると、自分にもまだ何かできるんじゃないかな、という気持ちになります。人間ってええなあ、好きやなあと思えてくるのです。

ここで改めて「PHDって何?」と聞かれて、言葉ではうまく説明できないけれど、「百聞は一見にしかず」という訳で、貴方も一度自分の手で事務所のドアをたたいてみて下さい。(YOOKO & ちなつ)

〈編集メンバー〉 赤松恵美子、伊藤洋子、柿原登志夫、梶原靖子、川那辺裕子、北原葉子、Jocelyn Caacbay、西松千夏

新規会員・寄付者ご芳名は、個人情報保護のため掲載しておりません。

新規会員・寄付者ご芳名は、
個人情報保護のため
掲載していません。